

What Will Be Lost From University, Do You Think?

いま、日本の入学式から桜が消えるかもしれない。そもそも事の発端は、今年 1 月に東京大学総長浜田純一が秋入学の早期実現を提言したことにある。浜田総長は我が慶應義塾をはじめ、他大学との協力を明言しており、この問題は日本全体を巻き込む論争に発展する模様だ。そこで今回(我々は)、4 人の慶應義塾教員に対して秋入学に関する意識調査を行った。

秋学期入学について賛成の立場を表明している教授の意見はこうだ。「秋学期にはデメリットもあるけれど、それ以上にメリットがある。私の考える一番大きいメリットは、学生の準備期間を設けられることにある。日本の大学生は入学が終わるとすぐに大学に入学することになる。履修のことなどの大学生活を送るにあたっては、2 か月くらいの準備期間が必要だと思う。海外の大学はオリエンテーション期間が長い。さらに、日本の大学生は 3 年の秋ごろから授業と就職活動を同時にやっているが、それも卒業から就職までに準備期間があつてよいと思う。デメリットとしては高校から大学までの中途半端なギャップイヤーがあげられるが、秋学期入学を取り入れるならば小学校から大学まで一貫して秋学期入学にすれば問題はないと思う。国際的な流れの中で秋学期入学は取り入れられるべきだと私は思います。」と述べている。また、別の賛成の立場を表明している教授の意見は「私は全面的に賛成です。入学試験を寒い冬にやることは受験生にとって最適な環境だとは思えません。雪によるダイヤの乱れが起きるリスクもあるので、春に試験をやる理由が私には特にないと思います。欧米各国の大学を見ても秋から入学するところがほとんどであるので、春入学だと海外の留学生が日本の大学に来ようとするとき大きな空白の時間が生まれてしまう。そのようなことを考えると、秋学期入学にしたほうがいいのではないかと思います。」秋学期入学に賛成をしている 2 人の教授の意見は以上だ。

それに対して必ずしも賛成とは言い切れないとする意見もある。必ずしも賛成ではない立場の、ある教授は『正直秋入学の話は塾長と他大学学長の間で進行しているにとどまっておろ、一般教員に具体的話としておりてくるレベルではない。』と話す。『私個人としては 1 番学生の為になる入学制度を望みますが、現段階ではこの問題に関して一概に賛成反対と言い切ることはできません。というのも一概にどちらが良いということとはできないですが、まだ日本の社会が秋学期入学に対応していないように思われます。たとえば就職活動の始まる時期。ギャップイヤーが合計 1 年間生まれますが、今の日本の現状を考えるにそのギャップイヤーを活かすことができるとは思えません。特に日本の就職活動は 3 年の秋から始まり、そこからは勉強よりも就職活動一色にシフトしてしまっていると思います。そうした中で、(ギャップイヤーを活かすこともできず勉強する時間も減ってしまうため)秋学期入学を採用してしまつてはまずいのではないかと思います。秋学期入学を採用する

メリットとしては外国人留学生を多くとれる。ということが背景にあると思いますが、日本は東日本大震災（特に原発事故）の影響で外国人留学生、とくにヨーロッパの留学生は減っているように思えます。そうした中で、日本の今の大学は果たして魅力的といえるのでしょうか？秋入学にしたからといって、留学生が増えるというのは安易な考えなのではないでしょうか？秋学期入学を導入する前に、まずは日本の社会全体が秋学期入学について理解をして受け入れる体制をとること。そして、海外の学生が勉強したいと思えるような魅力的な大学にすることが先決だと思います。』また、自身もかつて留学生として来日した経験を持つドイツ語教員のUさんは『私は大学生の時に 1 年間の留学予定で日本に来ました。...だから秋入学にすることで留学生にとってメリットが生まれることはよくわかります。しかし、この秋入学は誰のための制度なのでしょうか？』と疑問を投げかける。『世界的に若くて経験のある人材が重要視されているいま、...結局日本人学生にどれだけメリットのあるものにできるものにできるかが重要です。』と述べている。

自分たちがしっかりと知識と意見を持っていないと、大学が決めたことにただ流されてしまうだけになってしまいます。そうならないためにも、これからの大学の在り方について私たち学生がしっかりと知識を得て、考えることが私たちは大切であると考えています。

この記事を読んだあなたは秋学期入学についてどのような意見をお持ちですか？